

横超佛教学の出世本懐

—『涅槃経と浄土教』—

柳 田 聖 山

中国佛敎の研究は、数が少い。現代中国で、佛敎学が一時中断して、國際的に孤立したこと、日本のそれがインド佛敎に偏ったことなど、事情は多々あろう。中国の事情が変つて来ている今、日本における中国佛敎研究の不振は、当事者の怠慢といわねばならぬ。そんな学界の現状が話題にのぼるとき、関係者が決つて口に出すのが、横超慧日先生のことである。横超慧日先生と大谷大学佛敎学は、今も昔も比類少い中国研究の、國際センターの榮光を負いつづける。

先生の新しい御著書、『涅槃経と浄土教』を頂いたのは、昨年の春のことである。飛びつくように拝見し、再読参読しているうちに、私は右のような中国佛敎の問題に、自分の想念が傾いてしまっているのに気付く。夏のある夜、先生から電話があつて、紹介の拙文を求められるまで、御礼状も出してないことを知らなかった。早速、御返事をもつても、仲々筆が進まない。おそらくは、先生の学問の出世本懐を明かす、この本の

主題に入るには、その前に勉強すべきことが山ほどあるのである。

この本は、先生御自身のあとがきに明らかなように、涅槃経と浄土経の問題をテーマに、先生が以前に発表された九つの論文と、未発表の新草二篇を含んでいる。出典は、次のようである。

涅槃経と浄土教（未発表）

涅槃経の説時について 昭和四十六年七月、大谷学報第五十

一卷第一号

中国浄土教と涅槃経 昭和四十七年三月、恵谷先生古稀記念、

浄土教の思想と文化

佛性論上から見た親鸞の地位 昭和四十七年十二月、親鸞教

学第二十一号

親鸞聖人と涅槃経 昭和四十一年七月、親鸞教学第八号

親鸞聖人の読経眼 昭和二十九年三月、親鸞聖人論攷第三号

法華経と浄土教（未発表）

親鸞と天台学 昭和四十二年二月、大谷学報第四十六卷第二

号

法華一乗 昭和五十一年七月、法隆寺夏季大学講座読本

悪人成佛の信が成り立つまで 昭和四十五年七月、尾張講習

会講本

大般涅槃経解説 昭和四十五年八月、国訳一切経涅槃部

これらの標題と発表年時をみると、新草の二篇が他の九篇を総括して、今回公刊の直接の動機となることが判る。この

課題についての、先生の長く且つ根強い関心の所在が了解できるとくに、『法華経と浄土教』の一篇は、先に公刊の名著『法華思想』とこの本との関係を、もつとも明確に示して興味深い。ここ数年來、先生のお仕事は、法華経に集中している。関心は、漸く時を越えた感である。私がこの本を先生の出世本懐とみる、理由の一つである。この本は何よりも、先生の手堅い中国佛教研究の、そんな方法論を明かすところに、特色がある。

先生の御仕事は多方面だが、曾て昭和十七年に出された、日本評論社の東洋思想叢書の一冊として、『涅槃経』の名著があることを知らぬ人はあるまい。あたかも今、『涅槃経と浄土教』の公刊にあわせて、往年の名著が平楽寺書店のサーラ叢書に入り、新しく再刊されたことも嬉しい。初刊より四十年、先生の手法は少しも変っていないようだ。

先生が大谷大学佛教学教授として、東京より京都に居を移されたのは、第二次世界大戦が終つて間もなくの頃である。戦中戦後の学問不在の時代、大谷大学真宗学の学生であった私には、何よりも先ず生きることが精一ぱいであつた。私は曾我量深先生の講義をうけるほかは、当時京都大学の佛教学を担当された久松真一先生のところで、坐禅の実践に身を入れると共に、身のほども知らぬ思い上りから、先生の理論的哲学的な学問方法に、完全にうつつをぬかしていたので、横超先生の手堅い古風な中国佛教に、しばらくのうちは関心が涌かない。教室で、講義をきく機会はなかつた。佛教は実践第一、先死の解決が先と、いう、大きい妄想にとりつかれていたので。そんな当時の私が、

はじめて横超先生の警咳に接し、先生の学問に畏敬の思いをつのらせたのは、何といつても今の京都大学人文科学研究所で、塚本善隆先生を班長とする、肇論研究の末席に加えて頂いたことによる。横超先生は、この研究班の所外参加者として、もつとも強力な推進役の御一人であつた。大変失礼な言い方だが、当時の先生は本務の大谷大学より、この研究会の方に力を入れておられたようにおもえる。

肇論研究班は、中国中世の宗教を、原典に即して究明するのがねらいである。このくにおける佛教の成立と展開を、中国民族自身の問題として扱うのである。近代日本の佛教学の方法が、インドの原典解明に傾いてゆくうちにあつて、塚本、横超両先生の佛教学は、終始一貫して中国の佛教文献による、古風どころか、じつはもつと新しい仕事である。

私が塚本先生を訪ねたのは、同じ久松先生の学生として最長老格の藤吉愨海氏が、当時はまだ塚本班の助手として、人文科学研究所に勤務していられたことによるが、じつをいうともう一つ、私だけの内部事情があつて、大げさにいうと、これが戦後における私の、学問的な方法論の発見にかかわっている。

曾て、曾我量深先生の真宗学をうけていた仲間の一人に、二村思朗君という先輩がいる。この人は、年齢も学問も、文字通りに先学であつた。かれは私に、曇鸞の論註を読むことをすすめ、論註の権威として、塚本先生の名を挙げるのである。論註といつても、当時の私は鈴木大拙先生の『浄土系思想論』を読んでゐる程度で、これも亦た理論的哲学的な関心の一つで、論

註そのものについては何の関心もない。二村君が私に論註をすすめた理由は、いまだに未了の公案となっている。曾我先生の徹透した真宗学に、ただただききほれるばかりで、いつも夢のようなことを口ばしっていた当時の私に、客観的な手がかりを与えてやろうという、二村君の親切のほどは、やがてまもなく私にも了解できた。

藤吉さんのとりなしで、私は人文科学研究所に塚本先生を訪う。私の話をだまってきたいていられた先生は、さいごにただ笑われるだけで、肇論研究会にくることを命じ、横超先生の名をあげられたと記憶する。研究会に参加して一年、肇論の本文会説がほぼ終る頃、先生は私に涅槃経集解七十一巻のうちから、道生の注を引きだして、論文をまとめることを命じ、あらためて横超先生の指示をうけることをすすめられた。今にしておもうと、これが初対面のとときの、例の論註云々に対する、先生のお答えであつたらしい。おまえには、曇鸞は無理だよ、せめて道生でもガンバレというのである。横超先生の御指導で、道生の頓悟論をまとめることも、論註の本文研究を進めることも、共に私はいまだに果していない。しかし、そのことがあつてから、曾我先生や久松先生の透徹した哲学に程遠い、おのれの分に気付いたことと、漸くにして身の丈に似合う方法を見つけて、足が地についたことだけは確かである。たえず気になっていた、山口益先生の魅力ある文献学にも、思いきりがつく。

塚本善隆先生は、中国佛教の歴史研究を専門とされ、生涯のお仕事とされた。肇論研究班の発足に、横超先生の協力を求め

られたのは、思想研究の強化をはかつてのことである。横超先生は、京都においてになるまで、今の東京大学東洋文化研究所、曾ては京都の人文科学研究所と共に、東方文化研究所とよばれていた国立の人文系研究所のスタッフとして、最高權威であつた常盤大定先生の下で、中国佛教学を専門とされた。塚本先生と横超先生とのあいだには、すでに長く親しいおつきあひがあつた。横超先生が京都に来られたことは、戦後日本の仏教学にとつて、一つの大きい天機である。

肇論研究班は、漸くはじまつたばかりで、若くて活気にはやる、強のものばかりの集まりである。のちに京大文学部に移られる長尾雅人、島田虔次両先生をはじめ、新設の大阪大学文学部に出られる木村英一先生が、なお現役の所員でいられたし、滋賀大学からは村上嘉実、大谷大学からは横超慧日先生のお二人、そしてまだ文学部や研究所の若い助手であつた藤吉慈海、牧田諦亮、川勝義雄、梶山雄一、服部正明、木全徳雄、福永光司といった先生が、毎週一回、一堂に会して、午後半日近くも、侃々諤々の議論を戦かわせるのであり、厳しい学問的雰囲気のみち溢れている。戦後の学制改革で、大学も研究所も、改組と新生の真只中にある。わけでも、専門のちがうスタッフを集めての、総合研究の試みは、最も新しい方法の一つで、塚本班はそんな学問創造の先頭にあつた。

もともと、この研究班の発端は、弘明集の会説が前身で、側聞するところによると、何でも神田喜一郎先生が戦後はじめてパリにゆかれて、コレージュドフランス教授として著名なポール

ドミエヴィル先生に会われたとき、日本における新しい弘明集の訳注を求められたのが、きっかけであったらしい。当時、弘明集研究といえば、大東出版の国訳一切経に収める太田梯蔵氏の訓読が、唯一の成果である。塚本研究室が、そんな弘明集会読の途中で、テキストを肇論にきりかえたのも、一九四八年（昭和二十三年）に、リーベンタール氏の英訳が英国の東洋学誌に発表され、塚本先生と旧知のスタンフォードのアーサーライト氏が、これを批評する文章を出すなど、中国初期佛教に対する国際東洋学者の関心が、一時に高まったことによる。リーベンタール氏のお仕事は、戦時体制下におけるヨーロッパ東洋学の、孤独で強靱な学問的良心の健在を示す。驚きは、あたかもこれと前後し、コロンビア大学出身で、当時はなお少壮気鋭の国際級佛教学者、レオンハーヴィッツ氏が京都に来て、塚本先生の下で天台智顛の研究をはじめたことも関係する。世界の佛教学者の眼が、京都に集まっていたのである。

肇論の学問的口語訳という、日本で最初の成果が、こうして誕生する。訓読によらず、原典を直接に現代語に移す試みは、漢訳佛典では、肇論がかわきりである。サンスタリット原典の全訳をめざす、長尾雅人・梶山雄一両先生編の「大乘佛典」二十巻の完成は、つい最近十年来のことである。

研究班での横超先生の御発言は、いつも執拗である。テキストの一字一句の理解をめぐって、周到の論議をかさねることは、この研究班の常套手法であるが、横超先生と木村英一先生の御意見は、とくに異彩を加えた。出席者の意見が出尽くして、訳文

がほぼ定まるころになって、必ずあらためて他の意見を徴し、新しく問題を提起するのは、たいいてい木村先生である。「しかし」と切りだす木村先生の発言に応じ、更に別の解釈を示すのは、横超先生で、これで話はふりだしにもどる。木村先生の御発言は、上方特有のものやわからかきで、相手の説をすべて認めるかのようで、じつは少しも妥協を許さぬ、透徹した合理性を求める、もっとも強硬意見である。そんな強固な批判を切りくずすのが、横超先生であり、柔軟といえば柔軟であるが、これも亦たじつは執拗で、一步もゆずらぬ強靱さを含む。中国佛典の理解に、つねに強くて新しい総合の論理が必要なことを、あらためて痛感させられる一刻であった。

今、『涅槃経と浄土教』を拝見していて、そんな当時を想起するのは、私だけの感傷であろう。しかし、先生の御意見には、つねに先行の権威ある理解に対する、徹底して強引な批判と総合の手法があつて、そのことを見落とすと、ずいぶん退窟で難解な文章となってしまうからである。

たとえば、「涅槃経の説時について」のうちに、如来性品の本文をあげて（一〇四頁）、先生は法華経との関わりを説かれる。八千の声聞が記莂をうけ、大果を成ずることを認められたのち、一闡提もまたかくの如し、諸の善法において當作する所なし云々の段について、先生は全く古今独歩の解釈を加えるのである。原文のままだと、表現のうえで前後相矛盾し、合理的な説明ができぬからである。先生は、問題の所在をより明らかにするために、この一段を口語訳し、自説の根拠とされるのだが、そこ

に明らかに原文に見えぬ、「これに反し」という一句を挿入されている。じつをいうと、この一段については、すでに古来の異議があつて、天台智頭の法華玄義と、弟子章安の涅槃經疏とのあいだにすら、微妙な解釈のくいちがいがみられることは、先生が後段(二一〇頁)に詳しく分析される如くである。それは同時に、天台の涅槃經解釈という、先覚の意見に対する、先生御自身の疑議と批判よりくるのであり、じつはそうした隠頭の発想は、必ずしもこの一段に限らず、この本の随所に見られる特色となる。

「涅槃經の説時について」は、昭和四十六年七月発行の大谷学報第五十一巻第一号に、発表される。当時、すでに種々の批評があつたであろうし、別に先生の講義にもとりあげられたにちがいない。涅槃經の闡提佛性と法華經の声聞授記は、大乘佛教の中心テーマの一つであり、親鸞の浄土教の成立に、密接不離の関わりをもつ。それは、単なる原典の解釈にとどまらぬ、中国と日本の佛教学の核心にせまる、本質的な問題である。横超先生の多方面なお仕事が、何らかの意味で必ずそこに関つていられることも、今あらためて言うまでもないだが、それを先ず原典の解釈として提起される、先生の方法に私は尽きぬ興味をもつのである。言ってみれば、これは曾ての祖師たちの方法である。原典を加減し、前後の文を入れかえ、訓みを改めるという、こちら側の発想のうちに、じつはもともと手堅い宗学の問題が潜んでいる。こちら側の手堅さは、もともと虚心にあちら側の意見を問ひ、その声を聞くという体験あつたことである。親

鸞の佛教学は、その典型であらう。

あえて、右の涅槃經如来性品の一段について、私自身の臆説をいえば、秋取冬蔵の四字を上文につける、天台の玄義の説を正義としたい。「ところが」という、反接の辞を加えて、これを一闡提のこととする横超先生の口語訳と、内容的にこれに同意する章安以来の説は、あまりにも合理的にすぎず。秋は取め冬は蔵するという千字文の言葉は、確かに涅槃經以後のものだが、そうした農耕社会の発想は、曇無讖も知っていたにちがいない。先生が挙げる史記の例は、その一証となる。むしろ、六卷泥洹の文によつて、冬氷の一闡提という不思議な表現を、本来の梵文よりくるものとすれば、曇無讖の翻訳は、すでにすこぶる中国的発想に傾いていたといえる。徳王品以後に展開される、闡提成佛説を見越して、翻訳の筆に勇みがついたのではあるまいか。

もともと、一闡提の成佛という、この經の根本理念そのものが、すでにすこぶる非合理的な宗教体験の表明である。法華經の声聞授記は、そのさがけである。法華の出世本懐は、涅槃經に來て極まる。翻訳に矛盾を生ずるのは、むしろ当然のことである。かれらは、非合理的な体験を合理化するのになしに、非合理的な体験を表現する、新しい言葉を見付けた。大悲と信心は、その一つであらう。中国・日本の祖師たちの佛教学は、それぞれの時代の課題に応じて、新しい表現を工夫した。今日の佛教学は、曾ての宗学にもどすことのできぬ、より困難な課題を負うている。中国佛敎の研究の遅れは、この辺に理由がありそう

である。歴史研究は、比較的容易である。思想研究の困難は、戦後における哲学の凋落と共に、研究者自身の在り方に関係する。豊かな語学力と科学知識で、完全武装された研究書に、案外貧しい内容のものが多し。哲学の貧困による。あたまたから、既成の宗学に拠ることのできる人は、幸いである。一人一人が、天台智顛となり、善導となり、親鸞となるほかはない。

『涅槃経と浄土教』を拜見して、私の興味は、もっぱらそうした方法の問題に向う。浄土教といっても、今は親鸞が中心である。横超先生の学問の背後に、つねに親鸞の浄土教があった。今にして思うと、戦後、新しく出発した中国佛教学の、総合研究の方法のうち、もっとも後手に廻ったのは宗学である。先にいう、人文科学研究の場合も、例外ではあり得ない。『涅槃経と浄土教』の魅力は、そうした欠陥をつくところにある。既成の宗学にも、歴史研究にもとどまらぬ、新しい佛教学が提起される。じつさい、涅槃経と浄土教といっても、二つを並列して研究するとか、両者の関係を問うというのではない。あるいは又、涅槃経によって浄土教を考え、浄土教によって涅槃経を考えるというでもない。中国佛教学の思想的核となる、如来藏と佛性の構造を洗い、一闡提の問題に至ると、必ず曾て親鸞が歩いた道に出るのである。

周知のように、涅槃経は中国で、涅槃宗の拠るところとなるが、日本では一宗として定着しない。むしろ、大乘の奥義として、各派の宗学に影響するのであり、親鸞はその典型である。

親鸞の教行信証は、浄土の三経に拠りつつ、信心の根拠を追求

して、難治の機の問題になると、その成果のすべてを涅槃経の引用に任せる。横超先生が、有名な善導の二河喻を、涅槃経によって説かれるのは、庄巻である。

問題は、親鸞に限るまい。たとえば、親鸞と同時に道元が出る。道元の正法眼蔵佛性の巻は、涅槃経によっている。悉有佛性の四字を、「悉有ハ佛性ナリ」と読み、佛性に悉有せらるる自己の所在を明かすのである。原典の読みかえと加減の方法は、親鸞に劣らない。問題は、そんな道元が晩年に鎌倉に赴き、北条時頼のために書いた、と言われる法語の断片に、涅槃経梵行品の阿闍世の逆害と、六大臣訪問の段を引くことである。道元は、時の権力者時頼を阿闍世王にみたてている。引用は、教行信証のそれと同じく、一闡提の成佛がねらいである。言ってみれば、正法眼蔵佛性の巻は、この法語を得て、始めて完結する。鎌倉新佛教の展開に、涅槃経の果す役割りは、宗学のちがいに拘わらず、意外に大きいのである。

以上、横超先生の新しいお仕事に触発されて、ここ数年来、ひそかに考えている問題について、さいごに希望を一つ書かせて頂く。失礼の点は、くれぐれもおゆるし頂きたいが、できることなら涅槃経の原文すべての、学問的な口語訳の出版を希望する。先にいう、長尾・梶山両先生の編集になる「大乘佛典」に、涅槃経を欠くことは残念である。こうした仕事は、横超先生と門下の諸氏の学恩に待つところ、きわめて大きいものがある。

(一九八三年六月一日)

(昭和五十六年十二月 平楽寺書店 A5判 二八八頁 五八〇〇円)